『日本経済新聞』2003年7月14日夕刊、p.1.

日本の実力派たち

異文化理解の地平広げる

東京大学助教授

今橋 映子（いまはし えいこ）さん（41）

ひょっとしたら、東京はパリになっていたかもしれない。パリを手本に東京を改造する「幻のパリ計画」。明治なかばに浮上したが、現実論や渋沢栄一らの反対に阻まれた。けれども、そこから日本人のパリ憧憬（しょうけい）は出発する――。

九年前、『異都憧憬―日本人のパリ』でサントリー学芸賞を受けた。日本人の異文化理解の実相をあざやかに切り取った大著。「その力量は尋常ではない」（評論家の向井敏）。その後も着実に学究の道を歩む。

近刊の『〈パリ写真〉の世紀』。恩師の芳賀徹京都造形芸術大学学長がうなった。「写真の分野でこれほど書くことがあったとは」。新しいアングルをみつけるセンスの良さ。体系的・構造的に組み立てる力。「比較文学・比較文化の地平を、おし広げている。見ていて愉快です」

パリに一貫した関心を寄せる。「この国際都市が、多くの外国人芸術家によっていかに豊かに表象され、いかなる異文化体験の場として立ち現れてきたか」。島崎藤村の都市論がきっかけだ。

なぜ、フランスなのか、と聞けば「文法ががっちりしているフランス語が、律義な性格にぴったりと」で「大好きな宮沢賢治をフランス語訳したかったから」。

母から良質な童話を与えられて育った。童話から詩へ。魅惑の賢治ワールドが原点にあるらしい。弱者に限りない愛をもっているか、ぎりぎりのところで生きている人にすごくひかれる。

妹の理子も研究者。『江戸の花鳥画』でサントリー学芸賞を受け、姉妹受賞と話題になった。

だが、研究者になったのは迷いの果てだった。学習院大の学生のころ、アムネスティの署名活動を手伝って「向いてるかも」と思った。弁護士を志しかけたが、法曹界は、人間はかくかくしかじかであると決める職業」という文章に出くわしてやめた。「決められないと言っている」文学の方が性に合う。

「一歩、引いたところから世の中をみる。純粋に引けるからこそ何に加担することなく言える。それが大事だと思う」

「読まずして死ぬなかれ」。ナチに抗したユダヤ人、ヨーゼフ・ロートの『聖なる酔っぱらいの伝説』を、学生に薦める熱血先生でもある。

（文中敬称略）

文　小島英熙
写真　剣持常幸

＝毎週月曜掲載

神話読み解く「パリ三部作」

主著に本文中の二書と『パリ・貧困と街路の詩学―1930年代外国人芸術家たち』（九八年）があり、パリ三部作となっている。

芸術家のボヘミアン生活によって、多くの外国人を引きつけたパリ。エキゾチシズムの幻影を含み、精神的葛藤（かっとう）を引き起こす西洋文明の精華、ナチスの時代に亡命する精神の最後のよりどころだった都市の神話を読み解く労作だ。